

私見創見 Thursday

「よきもの、わかもの、ばかもの」の三拍子そろった者のたわ言だと思つて許していただきたい。移り住んで9年目になるが、八戸の印象は変わらず「カオス八戸」なのだ。

「混沌」を意味する「カオス」という言葉に、私が初めて出会ったのは美大に通っていた頃。2005年、「アーティスト」を刊行されたばかりの中沢新一先生(思想家

・哲学者)の講義の中だった。カオスとは、主神セウスをはじめとするギリシャ神話体系における原初の神であり、全ての神々や英雄たちの祖にあたり、有限なる存在全てを超越する無限を象徴している。無秩序で、さまざまな要素が入り乱れ、一貫性が見いだせない、ごちゃごちゃした状況・様相を形容する表現として用いられることが多い。講義を受けた美大生の私たちはカオスという言葉に希望を見いだし、とにかく言いたいモノ(者・物)に出会うと手当たり次第、「カオス」を連呼。2005年多摩美術大学の流行語大賞は、間違いなくそれだった。さて、なぜ私が八戸のことをカオスと感じたか少し紹介させていただく。まずは、引

八戸市美術館のプロローグ

「カオス八戸」どう見せるか

つ越してきた家の近くに立っていた「メドツが出るぞー」の看板(八戸市博物館蔵)。メドツ(かっぱ)は、八戸が起源という伝説があることを後から知った。「義経北行伝説」では、源義経が逃げ延び

て八戸からモンゴルへと移りチンギス・ハーンになったという。何でもある巨大朝市の「館鼻岸壁朝市」は、魚介類に始まり車まで売っていたというから驚きだ。未公認キャラクター「イカ

ドン」は、眉毛の「八戸」を含めフォームが秀逸である。ヒッチコック監督の名作パニックスリラー映画「鳥」をほろふつとさせる「蕪嶋神社のウミネコ」には、驚きと恐怖

におのいた。圧倒的なスケールを感じることができる探掘場「八戸キャニオン」。ハウルの動く城にも似た「八戸セメント」。東南アジアの市場を思わせる、八戸の台所陸奥湊駅前朝市」。映画「トラック野郎」で有名な「デコトラ」。高さ10メートルまでトランスフォームする「八戸三社大祭の山車」。など挙げれば

八戸の皆さんはそれが身近にありすぎてピンと来ていない様子である。そして、芸術文化では「本のまち」「演劇のまち」「俳句のまち」「写真のまち」「アートのまち」など、結局、何の街を自指しているのか謎だ。が整理できない程、多文化な街であることは間違いない。同時多発的にさまざまなイベントが開催されており、何かアーム」がテーマの新しい八戸市美術館。こけら落としの企画展は、八戸三社大祭をモチーフとした「ギフト、ギフト、」だ。



佐貫 巧

八戸学院大 短期大学部准教授

さぬき・たくみ 1982年、静岡生まれ。多摩美大卒、東京芸大大学院修了。2013年から現職。14年より八戸圏域で現代芸術教室「アートイズ」を主宰し、アートを通して少しでも生きやすい世の中をつくる活動をしている。おいらせ町在住。

8月8日に、八戸市美術館が開館に向けたプレイベント「開館まで88日！カウントアップイベント」として、創作ワークショップをアーティスト

が担当させていただいた。同日、仙台フィルハーモニー管弦楽団のミニコンサートや佐藤慎也館長と同館スタッフの座談会などが開催された。

このほかにも、開館前の「美術館のプロローグ」として、体感できるさまざまなプログラムを楽しむことができる。一種を新し、人を育み、100年後の八戸を創造する美術館(出会いと学びのアートフアーム」がテーマの新しい八戸市美術館。こけら落としの企画展は、八戸三社大祭をモチーフとした「ギフト、ギフト、」だ。

このラジカルな人間性の変容を許容する街「カオス八戸」を、どう編集して見せていけるかが腕の見せ所である。さあ、のろしは上がった。後は多様性を認め合い、それを生み出せるかどうかだ。